

# !!! 今月の SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて毎月紹介して行くコーナーです。今月はこのおふた方です。

RYO MOTOHARA



第18航空団法務局法務顧問

まつだ だかし  
松田 孝志さん



第18航空団法務局通訳官

もとはら りょう  
本原 亮さん

TAKASHI MATSUDA

## Q1. あなたの職種と仕事の内容をお聞かせ下さい。

**松田さん** (以下敬称略) : 日本の法律に関するアドバイザーをしています。米合衆国空軍の日米地位協定に該当する軍人、軍属または家族の者が日本の法律を犯したとき、日本の司法制度の下での見通しや処分、あるいは対処の仕方についてアドバイスをします。民事よりも主に刑事事件を扱いますが、日本の当局において円滑、また迅速に犯罪捜査及び処理がなされるよう日本の警察や検察庁また裁判所と密に連携をとりながら仕事をします。空軍関係者の裁判が日本の法廷で開かれる際、日本の弁護士を雇ったり、裁判が公正に行われるかを見るために、法務官と共にオブザーバーとして法廷に出席します。その他、留置場や拘置所に容疑者の面会に行きます。多いときは年間190件ほどの事件や事故の処理に関わります。

**本原さん**(以下敬称略) : 国際法課で通訳、翻訳職に就いています。主な業務は刑事事件に関して日本側の司法機関との連絡折衝ですが、軍事裁判課の要請に基づいて捜査資料の翻訳や、日本人の証人、被害者の通訳、それと法律相談の際の通訳や、日本の法令に関する調査(リサーチ)業務のほか、法務部が必要とする翻訳や通訳を行います。

## Q2. この職場に勤めてどのくらいですか？



**松田** : 15年になります。ここに来る前は憲兵隊で約3年勤めました。法務局には、日本人は私と本原さんを含め3名働いています。仕事量を考えると日本人スタッフがもう少し欲しいです。

**本原** : 法務部で勤務して13年になります。その前は、松田さんと同じく憲兵隊で3年勤めました。法務部には約30名の職員が軍法課と総合法課に分かれて勤務しています。総合法課の中に賠償、国際法、民法の部署があります。法務部には日本人が3名、州の資格を持っている軍人の法務官が約10名を含める軍人が20名、軍属6名の職員が働いています。

## Q3. この仕事のどの様なところにやりがいを感じますか？

**松田** : 犯罪が迅速かつ適切に処理されるために、コーディネーターとして日米双方の当局に協力できることです。勿論、物事がいつも順風満帆とはいきませんが。

**本原** : 他職種に比べると達成感は薄いかもしれませんが。それでも仕事の内容は変化に富んでいますので緊張感を失うことはありません。日米の法律の違いを比較したり、解釈の違いに関心したりという事もありますので、法律の面白い部分を直に感じる事ができる場所です。

(写真全て、米空軍チャッド・ウォーレン一等兵撮影)



(インタビューは次ページへ続く)

Q4. この仕事の一番の課題は何ですか？



松田：課題は色々ありますが、犯罪の処理にあたり、法律や日米地位協定の条文の解釈のしかたが微妙に食い違ったり、文化の違いゆえに日本人の被害者への対応の仕方が米国人にはあまり理解し難いようなので、そこをいかに理解してもらうか等が課題といえるかと思います。

本原：課題というより大切な所は、この仕事は英語の知識は勿論ですが、法律の知識を深めるのが必要で、私は常に正確で忠実な通訳を心がけています。法律に携わる仕事なので、英語と法律の両方の知識を深めることによって信頼度が上がると思っています。私事ですが、法律の知識を深めるために、放送大学で刑法について半年間、通信教育で学びました。次は民法も受講したいと思っています。

Q5. 米国人と働く環境での違い、または課題はどういうところですか？

松田：米国人の民族性、あるいは性格的なものからくるのかも知れませんが、物事を遂行、解決するにあたりバイタリティを感じます。よく言えば積極性が強く、悪く言えばせっかちと言えるかもしれません。米国人は意思表示や自己主張は日本人よりもはっきりしており、それ故に、日本当局に性急に事故処理を要求したりするので、時として日米双方に摩擦が生じたりします。そういう時はコーディネーターの立場として厳しいところです。米国人はせっかちと大らかな面を両方持っていますので、一緒に仕事をしていて退屈することはないです。

本原：日本と違って仕事帰りの飲み会やカラオケといった半強制的な付き合いがほとんどないのは良いことです。文化の違いもありますが、良い印象を米国人に与えるのはとても大切で、第一印象が悪いとそれを覆すのは容易でないと感じたことがありました。また10年以上働いていれば全て経験したことのあるケースばかりと思われたりしますが、ここは新しい事案が起きたりするのが常にあります。

Q6. 軍の仕事で一番驚いた事は？

松田&本原：9.11同時多発テロ直後の厳重な軍の警戒、警備の状況には驚きました。通勤時の車の点検など妙に緊張しました。軍隊というものを実感しました。テロ後の軍の警戒態勢は全くといっていいほど変わりましたね。



(写真全て、米空軍チャッド・ウォーレン一等兵撮影)

Q7. 同じような職種に就こうと考えている方へのアドバイスは？

松田：仕事の性格上、短気な性格の人には少し難しいかもしれません。事件や事故の発生に対し、冷静、沉着かつ迅速な対応が求められます。米空軍法務部のコーディネーターとして日本の司法及び捜査当局と連絡を取ったりするので、礼儀正しさも求められます。ある程度の英語力は当然要求されます。時として日本の法廷に法務官と共に出席するので、渉外官として自覚し身なりも大切な要素の一つでしょう。

本原：時には厳しい交渉に臨むこともあります。その為、通訳中は自我を捨て、話者の忠実な分身になりきって正確な通訳をするように努めることが大切だと思います。



毎年ゴールデンウィーク期間中の5月5日に、那覇ハーリー船競漕が那覇新港で開催されます。ゴールデンウィーク期間における県内最大規模のこの伝統競漕には、地元と在沖米軍から約50チームが栄光を競います。嘉手納基地からは、「ショーグン」空軍チームとして、男子 女子チームの約90名が参加しています。

ここで空軍チームの練習の様子をご紹介します。毎年12月には参加者を募集し説明会を開き、ハーリーの歴史、過去の競漕成績、練習内容 時間 場所などをコーチが説明します。また過去の競漕の様子の映像を見せながら、4分から6分台という短時間の競漕にも関わらず、いかにハードなテクニックが必要とされチームワークが大事かを理解してもらいます。その後1月からはすでに練習が開始され、平日は仕事前の早朝（午前5時頃）と仕事後の夕方の時間帯に筋力トレーニングをし、週末になると、プールや嘉手納マリーナの桟橋で、オールの漕ぎ方を練習します。4月になると那覇市泊港内で、5月5日に実際使用される船に2回乗船してそれぞれ1時間の洋上練習を行います。ハーリー大好きなメンバーにとって数ヶ月も練習しているのに実際の乗船練習が2回しかないのがとても残念らしいです。

今年は5名のコーチがいて、中心となってコーチを務めているのがセレナ・ハーモン兵長です。彼女は、「仕事の任務の都合で、全員揃っての練習が毎年難しくなってきました」と話し、全体練習の難しさを感じているようです。また「実際の船を使用しての練習が少ないため、漕ぐ技術を高めるのは難しいが、今年の目標は少なくとも6分以内ではゴールしたい。沖縄の伝統的文化をまた楽しむことができるのを嬉しく思う」と抱負を述べました。那覇ハーリー船競漕の結果は、6月号に掲載します。

ショーグンチーム、ちばりよー！



(写真全て、米空軍：ネスター・クルーズ二等軍曹撮影)